



主張における他者配慮に関する発達臨床心理学的検討

著者	江口 めぐみ
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102乙第2868号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00152509

〔博士論文概要〕

主張における他者配慮に関する発達臨床心理学的検討

平成 29 年度

江 口 め ぐ み

(立正大学心理学部)

1. 本研究の目的

これまでの主張性研究では国内外ともに「自身の気持ちや感情を表明できるか否か」という「自己表明」の側面から検討が行われてきた。しかし協調を重視する日本においては「周囲や他者への配慮」が重視される独自の主張スタイルも存在することから、自己表明のみから主張性を検討することへの限界が指摘されている。これを受けて近年では、「他者配慮」の視点を加え主張性を再検討する研究が見られるようになった。だがこれらは青年期・成人期が中心であり、児童を対象とした研究は見当たらないという現状があった。こうした背景を受け本研究では、児童の主張における他者配慮に注目し、主張性を自己表明と他者配慮の2側面から捉え直すこととした。具体的には、以下を明らかにすることを目的として研究を行った。

目的 1：児童用の他者配慮尺度を新たに作成した上で、主張性の類型化を行い、その特徴を検討する。

目的 2：他者配慮の観点を加えた主張性と、心理社会的適応との関連を検討する。

目的 3：他者配慮の観点を加えた主張性と、主張行動および認知的処理過程との関連を検討する。

2. 本研究の内容と構成

第1部では理論的背景の説明として、第1章で主張性に関する先行研究を概観し、本研究の動向と今日的課題を取り上げた上で、第2章において本研究全体の目的と意義、内容構成について述べた。

第2部では、第1部で挙げた目的に対応する形で実証的検討を行った。

目的1に関しては、第3章で主張における他者配慮尺度を作成し（研究1-1）、第4章でその信頼性と妥当性の検討を行った（研究1-2）。また第5章で主張性のタイプを類型化し、心理的特徴との関連を検討した（研究2）。

目的2に関しては、第6章で自己表明・他者配慮と心理社会的適応との関連について、自己評価・他者評価による検討（研究3）を行い、第7章で短期縦断的調査による検討（研究4）を行った。さらに第8章で自己表明・他者配慮と心理的ストレス過程との関連について検討を行った（研究5）。

目的3に関しては、第9章で自己表明・他者配慮と主張行動との関連の検討を行い（研

究 6), 第 10 章で社会的情報処理の観点から, 主張性が主張行動の産出に及ぼす影響を検討した (研究 7)。

第 3 部では総括として, 本論文で得られた結果と知見を整理し, その意義と限界, 今後の課題について述べた。

3. 本研究の結果

第 1 部においてこれまでの研究を概観し, 主張における他者配慮を「他者との相互作用の中で, 自己の考えや感情を表明する際に, 自己表明によって相手の感情・考え・正当な権利を損なわないよう図る心的努力」と概念的定義を行った。

目的 1 に関しては, 第 3 章 (研究 1-1) で小学 4~6 年生および教員を対象に, 主張における他者配慮尺度の項目内容が検討され, 1 因子からなる 16 項目の他者配慮尺度が作成された。また男女差を検討した結果, 女子が男子に比べて有意に他者配慮得点が高いことが示された。

第 4 章 (研究 1-2) では, 作成された尺度の信頼性・妥当性の検討が行われた。その結果, 作成された他者配慮尺度は, 高い信頼性と妥当性を有していることが確認された。この尺度は以降の研究 (研究 2~7) において使用された。

第 5 章 (研究 2) では, 自己表明と他者配慮得点の組み合わせから主張性を 4 つに類型化し, その心理的特徴を明らかにした。その結果, 男子の「配慮優位」群と女子の「両低」群で対人不安と不表出性攻撃が高く, 自己表明の低い 2 群において不適応的な主張行動につながりやすい心理的特徴が見られた。また各類型の特徴が男女で異なることが示された。他者配慮の視点を導入することで, 自己表明のみでは分類が困難であった不適応的要因との関連について詳細な検討が可能となった。

目的 2 に関しては, 第 6 章 (研究 3) で主張性の各類型と内的適応, 外的適応との関連が検討された。その結果, 男女ともに「両高」群で自尊感と学級適応感の高さ, 肯定的な他者評定との関連が示された。また「配慮優位」群は男女で顕著な差が見られ, 男子では教師からの適応評価が低いのに対し, 女子では被承認感, 仲間からの人気, 教師からの適応評価が高く, 他者配慮が優位であることの意味が男女で異なることが示唆された。

第 7 章 (研究 4) では, 主張性と内的適応, 外的適応の因果関係が検討された。その結果, 自己表明は自己に関する内的適応感と, 他者配慮は周囲との関係に影響される外的適応感と, それぞれ影響を及ぼしあっていることが確認された。すなわち主張性は, 6 ヶ月

後の児童の適応に寄与するだけでなく、適応状況からの影響も受けていること、主張性の2側面で適応との影響関係が異なることが示された。

第8章（研究5）では、心理的ストレス過程への影響について検討がなされた。その結果、「両高」群が「両低」群に比べてストレス反応が低いこと、主張性が心理的ストレス過程に影響し、ストレス反応を低減させることが示された。また自己表明はストレス反応を直接低減させ、自己表明と他者配慮は回避的コーピングを介して間接的にストレス反応を低減させており、それぞれ影響過程が異なっていた。

研究3～5の結果より、「両高」群が「両低」群に比べて内的・外的適応状態が高く、心理的ストレスが少ないことが示され、他者配慮と自己表明の両立が心理社会的適応に寄与することが実証された。

目的3に関しては、第9章（研究6）において2つの対人場面（肯定的場面、対人葛藤場面）を設定し、主張性と主張行動との関連について検討を行った。その結果、とくに葛藤場面では自己表明と他者配慮の高さによって、産出される主張行動に差があることが示された。「両低」群でも「感謝」、「断り」といったシンプルな主張行動は可能であったが、「両高」群では、友好性を示しつつ自分の意見を表明するような高度な主張行動が多いことが示された。

第10章（研究7）では主張行動への影響を、主張性および社会的情報処理の観点から検討を行った。その結果、自己表明と他者配慮では対人場面での認知処理過程への影響が異なり、そのため産出される主張行動に違いが生じることが明らかとなった。全体として自己表明は「自分の意見を表明するか否か」という行動的側面に影響を及ぼし、他者配慮は「相手への気遣いが含まれるか否か」という配慮の有無に影響を及ぼしていることが示唆された。

研究6，7の結果より、他者配慮と自己表明が高い児童は、相手への配慮をし、自分の気持ちや考えを主張する「自分も相手も大切にしたい自己表現（平木，1993）」につながるような認知的処理と主張行動を多く選択することが示され、主張性の概念的定義と一致する結果となった。

4. 本研究の意義

本研究は、これまで明らかにされてこなかった児童の主張における他者配慮を新たに検討した点に特色がある。本邦では、この分野の信頼性と妥当性が確認された児童用尺度が

存在しなかったことを考えると、本研究の意義は大きいといえる。また本尺度と自己表明尺度と組み合わせて用いることで、自己表明と他者配慮が異なる働きを持つことが明らかとなった。これにより、児童の主張性と心理社会的適応、主張行動、認知的処理過程との関連について新たな知見を得ることが可能となった。

さらに教育実践について、主張性は「対人トラブルの予防や解決に役立つだけでなく、コミュニケーションを円滑にし、対人適応を高めるなどに役立つ（渡部・稲川，2002）」という前提のもとで実践活動が行われているが、本論文において他者配慮と自己表明の 2 側面が高い「両高」群でおしなべて心理社会的適応が高いという結果が得られた。このことから、「自己も相手も大切にしたい自己表現」である主張性の意義を、実証的にも裏付ける結果となった。また主張性を類型化した検討によって、各類型の特徴や男女差が示されたことも、より効果的な主張性教育や実践活動を議論する際の一助になるものと考えられる。